

大友時代を
生きた人々

鹿毛 敏夫

「鶴崎守護神・
吉岡妙林尼」の
像（大分市）

吉岡妙林尼



鶴崎城を島津軍から奪還

れた島津軍は、豊後からの撤退を始めます。島津側に寝返ったように見せかけていた妙林尼は、撤退軍に同行するとして油断させ、急ぎよ、乙津川辺りで奇襲攻撃を仕掛けました。

この不意打ちによって、吉岡軍は、伊集院久宣ら大勢の島津兵を討ち取りました。その後、妙林尼は、討ち取った島津兵63の首を、丹生島城の大友義興に届けたとされます。こうして妙林尼は、鶴崎城の奪還に成功し、島津軍に討たれた夫吉岡鑑興のあだ討ちを果たすことができたのでした。

正史に残る女性の記録は極めて少なく、妙林尼についても、生没年はおろか、その出自や出家前の名前も定かではありません。そのため、不在中の息子に代わって城を守り、智謀を尽くして戦い抜いた、この女武将としてのエピソードも、後世の軍記物などによる創作である可能性も否定できなくはありません。しかしながら、戦いの勝者と性別の男性の側ばかりから語られてきた日本の歴史を、敗者および女性の側からも正しく見つめ直すためには、妙林尼のような人物に関する史料を、今後詳細に分析していく必要があります。

翌15(87)年の3月になると、大友氏への援軍を約束していた豊臣秀吉が出兵を開始します。大軍の豊臣勢の九州進軍に押さ

同時代の京都大徳寺の禅僧玉仲宗瑠から民衆思いの「豊老」(豊後の家老)と賞賛された吉岡長増には、鑑興という跡継ぎがいましたが、長増が没した5年後の天正6(1578)年、薩摩の島津軍と交戦した高城・耳川合戦で戦死します。鑑興夫人は、その夫を弔うために出家し、妙林尼と称したとされます。島津氏と大友氏の関係はその後も悪化し、天正14(86)年12月にはついに、島津軍が豊後に

侵入。大友義興(宗麟)は臼杵の丹生島城に籠城して防戦します。さらに、島津方の重臣伊集院久宣らは、大分郡高田庄の鶴崎城にも攻めかけます。鶴崎城は吉岡氏の居城で、鑑興の子統増が当主でしたが、その時、主君義興に従って丹生島城にこもっていたため、鶴崎城での防戦指揮は、母親の妙林尼が担ったといわれます。女・子ども中心の弱小戦力で籠城した妙林尼は、城の周りに

とりでを築き、落とし穴や鉄砲を駆使した奇襲で、島津軍の攻撃を退けました。最終的には、籠城兵の命と引き換えに開城する和睦を結び、妙林尼は包囲する島津軍に城を明け渡すことになりました。この時、妙林尼は、城内に進駐する島津兵をもてなし、酒を振る舞ったとされます。